

## エルヴィン・パノフスキーの生涯と業績

高木昌史

### 序

イコノロジ研究で有名な美術史家エルヴィン・パノフスキーが残した業績は、あまりにも偉大かつ膨大で、ジャンルも多岐にわたるため、全体像を把握することは殆ど不可能に近い。本稿は、彼の生涯の足跡を辿り、その著作を系統別に整理し、仕事のおおよその輪郭を描くことによつて、その奥深い世界に分け入る糸口を探ろうとする試みである。

ユダヤ系のドイツ人であったパノフスキーは、ナチスの時代、アメリカ合衆国への亡命を余儀なくされ、第二次世

界大戦後も同地に留まってそこで亡くなった。それ故、彼の活動は大きく亡命の前と後に大別される。著作も、亡命前はドイツ語、亡命後は大部分が英語で書かれた。わが国では、パノフスキーの代表的著作は殆どが翻訳出版されているが、ドイツ時代の論文は翻訳されていないものが多い。そこで以下においては、主に、亡命前の著作と論文を詳しく紹介したい。稀代の美術史家の原点を知るために、またその後の彼の足跡を辿る上にも、それは多くの示唆を与えてくれると思われる。

## 一 生涯

エルヴィン・パノフスキー Erwin Panofsky は、一八九二年三月三十日 ドイツのハノーファーに生まれた。父親アルノルト・パノフスキーはオーバーシュレージエン（シレジア、現ポーランド領）出身の東欧ユダヤ人（アシケナージ Aschkenasi）、母親ツェツィーリエ・ゾリングはスペイン・ポルトガル系ユダヤ人（セファルディ Sephardi）で、いずれもユダヤ系であった。

一九〇一年、一家はベルリンへ移住し、一九一〇年にパノフスキーは高等学校卒業試験の後、（ブライスガウの）フライブルク大学で法学を学んだが、すでに最初の学期に、美術史専攻の友人に誘われて、ヴィルヘルム・フェーゲ Wilhelm Vöge のデューラー講義「ロザリオの祝祭」を聴講し、次の学期をベルリン大学で終えた後、美術史に専攻を変え、続く学期はミュンヘン大学で美術史と考古学を学んだ。翌一九一一年、新たにベルリン大学で美術史を勉強し（当時、ハインリヒ・ヴェルフリン Heinrich Wölfflin、アドルフ・ゴルトシュミット Adolph Goldschmidt 等が教え

ていた）、同時に、哲学を熱心に研究した。

一九一三年、パノフスキーは、グリム財団のコンテス・ト、「デューラーとイタリアの美術理論家、とりわけレオナルド・ダ・ヴィンチ」との関係」を視野に入れた懸賞問題に応募して合格、一学期をフライブルク大学で過ごした後、一九一五年、当地で、『アルブレヒト・デューラーの芸術理論』Die theoretische Kunstlehre Albrecht Dürers（『デューラーの美学』Dürers Aesthetik）に関する論文——懸賞論文の一部——によって学位を取得する。同論文は『デューラーの芸術理論、とりわけイタリア人の芸術理論との関係から』Dürers Kunsttheorie vornehmlich in ihrem Verhältnis zur Kunsttheorie der Italiener の題名で、一九一五年に出版された。

学問上の師の中で、パノフスキーは、アドルフ・ゴルトシュミットと並んで特に博士論文の指導者ヴィルヘルム・フェーゲに尊敬の念を抱いていた。また学生時代からアメリカ亡命の時期に至るまで、彼はバロックとマニエリスムの研究者ヴァルター・フリードリッヒ Walter Friedländer——フライブルク大学で助教授として教えていた——と親密な友情を結んだ。また学位取得後、ベルリ

ン大学の美術史と考古学の演習に参加し、アドルフ・ゴルトシュミットのゼミでドーラ（ドロテア）・モッセ Dora (Dorothea) Mosse と知り合い、一九一六年、彼女とユダヤ式の結婚式を挙げた。ドーラはパノフスキーより七歳年長で、大ブルジョワの生活環境で育った。ちなみに、彼女は、最初の日本国憲法（大日本帝国憲法、一八八九年）の立案に指導的な役割を果たした父アルベルト・モッセと共に、幼少期を日本で過ごしている。

ところでパノフスキーは、一九一一年、志願兵として兵役に服したが、一九一五年、落馬事故に見舞われ、以後は任務から解放されていた。しかし一九一七年、彼はカッセルの軍管区司令部に召集され、妻と共に当地へ引越え、翌一九一八年には新たにベルリンに移動させられ、一九一九年に兵役を解除された。その間、カッセルで長男ハンス、ベルリンで次男ヴォルフガングが生まれている。

一九二〇年、二十八歳となったパノフスキーは、教授資格を取得するようにハンブルク大学から勧誘される。新設された美術理論の研究室に、当大学はパノフスキーを呼びたかったのである。彼のデューラー研究にかねて注目していたハンブルク美術館館長のグスタフ・パウリがその仲介

の労を取った。ハンブルクのヴァールブルク文庫とその創始者アビ・ヴァールブルク Aby Warburg（一八六六一—一九二九）を、パノフスキーは一九一五年の研究旅行の際にすでに知っていた。一九二〇年、パノフスキーはミケランジェロに関する論文で教授資格を取得、無給大学講師として勤務し始め、数年間は学術上の臨時雇いの給与を受けて取った。そして一九二六年、正教授となった彼は、ベルリン大学のアドルフ・ゴルトシュミットおよびハレ大学のパウリ・フランクル Paul Frankl と並んで、ユダヤ人出身の美術史講座担当者の一人として活躍した。

一九二〇年からナチスを逃れてアメリカ合衆国に移住する一九三三年まで、パノフスキーはハンブルク大学できわめて実り多い教育と研究の年月を過ごした。この間に彼は、オランダ絵画、イタリア・バロック、十五世紀ドイツ絵画に関する講義を行い、約四十篇の学位論文を指導した。その後も、彼はハンブルク時代の学生たち、またアメリカ合衆国へ移住した美術史家らと、生涯にわたって固い友情で結ばれた。

一九二九年、パノフスキーはハイデルベルク大学から招聘されるが、それを辞退し、二年後の一九三一年秋、今度

はニューヨーク大学から、一学期間、客員教授として招待され、それを受諾する。彼の講義が評価され、以後三年連続して、彼はハンブルクとニューヨークで一学期ずつ交互に過ごすことになる。一九三三年春、ナチスがユダヤ人を公職から追放したとき、彼はニューヨーク滞在中で、電報によつてドイツから解雇を伝達された。彼は、急遽、ハンブルクに戻るが、元の職場に復帰することを拒絶し、学生の博士号学位のための最後の口述試験を、特別の承諾を得て、自宅で行つた後、一九三四年、家族と共にアメリカ合衆国へ移住した。それは正しく危機一髪であつた。というのも、一九四〇年代に、三十名以上の彼の親族がナチスによつて殺されるか自殺に追いやられたからである。

パノフスキーは、合衆国では当初、臨時雇いの不安定な大学教師の職に就いた。ニューヨーク大学では、個人の基金から給与を出すことに異論が出され、プリンストン大学からも給与は支払われなかったが、二人の息子の授業料は免除された。翌一九三五年、パノフスキーはプリンストンに新設された高等研究所 *Institute for Advanced Study* の人文学研究部門の常任構成員に招聘された。基礎研究と学問的な連繋を制度化するためのこの機関で、彼は活動を開始

し、デューラーに関する専門研究（一九四三年）、初期オランダ絵画の概論（一九五三年）等、重要な仕事を完成する。

堪能な英語を駆使し、痛烈な機知を弄する亡命者として、その後、パノフスキーは大西洋を隔てたアメリカ合衆国で活躍する。多くの榮譽に包まれ、名誉教授となつた一九六一年以後も、主にニューヨークとプリンストンで、彼は教育と研究を続けた。一九六五年、妻ドーラが亡くなるが、その翌年、若いドイツ人美術史家ゲルダ・ゼルゲル *Gerda Soergel* と再婚し、一九六六年にドイツを旅行、翌一九六七年にも公務でドイツを訪れ、プロイセン勲功章等を授与されている。そして一九六八年三月十四日、パノフスキーはプリンストンで死去した。享年七十六歳であつた。

#### アメリカ合衆国に亡命したドイツ知識人

ユダヤ人であるために、あるいは己の信条から、ナチス政権下の祖国を離れてアメリカ合衆国へ移住したドイツ人は多い。パノフスキーと何らかの関わりのある幾人かの当時の様子を覗いてみたい。

先ず、作家トーマス・マン(Thomas Mann)一八七五—一九五五)は、ユダヤ人ではなかったが、反ナチスの立場から、一九三六年にドイツ国籍を剥奪され、一九三八年、アメリカ合衆国へ移住した。最初、プリンストン大学の人文文学部門の客員教授となり、その後カリフォルニアに移って、一九四四年にはアメリカ国籍を獲得し、一九四七年に長篇小説『ファウストゥス博士』を刊行した。小説執筆に際して、彼は当時カリフォルニアに在住していたユダヤ系ドイツ人アドルノに協力を仰いだ。マンは、パノフスキーと同じ頃、一九三八年夏から一九四一年春までプリンストンで暮らしたが、二人はそれ以前からの知己であった。

社会哲学者であり音楽学の専門家でもあったテオドール・ア・W・アドルノ(Theodor W. Adorno) (一九〇三—一九六九)は、一九三三年、ナチスによるユダヤ系教員の解任政策によって教授資格を剥奪され(当時フランクフルト大学私講師)、翌一九三四年にイギリスのオックスフォードに亡命したあと、一九三八年、ニューヨークへ移住し、その頃当地に本拠地を移していた(フランクフルト)社会研究所の연구원となった。ユダヤ系の社会哲学者マックス・ホルクハイマー(Max Horkheimer) (一八九五—一九七三)

が主導していた研究所である。アドルノはプリンストン大学の「ラジオ調査プロジェクト」の音楽部門を担当するが、その後、一九四一年、南カリフォルニアに移住し、作家を主人公に小説を書いていたトーマス・マンに助力した(前述)。アドルノに関して、パノフスキーは後述のクラウアーとの往復書簡の中でしばしば触れている。第二次世界大戦後、トーマス・マンはヨーロッパに帰還し、スイスに定住して当地で没した。アドルノとホルクハイマーは一九四九年にドイツに帰国し、フランクフルト社会研究所を再建する。

アドルノに大きな影響を与えたユダヤ系ドイツ人の文芸批評家ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin) (一八九二—一九四〇)は、一九三三年、パリに亡命したが、一九四〇年にドイツ軍がこの首都に接近すると、ピレネー山脈を越えてスペイン入国を目指した。しかし不運にも国境で足止めされ、結局、服毒自殺を図った。彼もアメリカ合衆国への脱出を計画していたのである。パノフスキーは、メランコリー論をめぐって、クラウアーおよびベンヤミンと深く関わっている。ベンヤミンと親しかった同じくユダヤ系ドイツ人の社会哲学者ハンナ・アーレント(Hannah

Arendt (一九〇六—一九七五)は、一九四一年、リスボン経由でアメリカ合衆国への脱出に成功し、一九五〇年、同国に帰化した。彼女は一九五三年から一九五六年まで、プリンストン大学とハーヴァード大学で講義を行ったが、当時、彼女はプリンストン大学で初の女性教授として有名となり、パノフスキーもクラカウアー宛書簡の中でそのことに触れている。

ユダヤ系ドイツ人でロマンス語文献学者のエーリヒ・アウエルバッハ Erich Auerbach (一八九二—一九五七)の場合は、マールブルク大学教授として活躍していた一九三五年、ナチスの反ユダヤ政策「ニュルンベルク法」によって大学を追われ、一九三六年から一九四七年までイスタンブールのトルコ国立大学に勤務して名著『ミメーシス』(一九四六年)等を刊行した後、アメリカ合衆国に移住、プリンストン高等研究所で文芸批評の教授を勤め(一九四九—一九五二)、イェール大学教授としても活躍し、一九五三年に妻と共に同国に帰化、一九五七年に死去した。パノフスキー宛のクラカウアーの書簡の「註」には、後者の『映画の理論』(一九六〇年刊)に関連して、アウエルバッハの名が挙げられている。

最後に、アドルノやベンヤミンとも親交のあったユダヤ人社会学者ジークフリート・クラカウアー Siegfried Kracauer (一八八九—一九六六)は、一九三三年、アメリカ合衆国に亡命し、その後、ドイツ映画を通じてナチズムの心理学的分析を試み、名著『カリガリ博士からヒトラーまで』(一九四七年)を著したが、彼は、亡命後、パノフスキーと四半世紀にわたって書簡を交わした。その往復書簡はパノフスキーに関する貴重な伝記資料を提供してくれる (Siegfried Kracauer—Erwin Panofsky Briefwechsel 1941—1966, Akademie Verlag, Berlin, 1996)。

以上、ナチスの時代、アメリカ合衆国に亡命したドイツ知識人を紹介した。亡命途上で自殺した人(ベンヤミン)、戦後、スイス(トーマス・マン)あるいはドイツ(アドルノ、ホルクハイマー)に帰国した人、アメリカに留まって帰化した人(アーレント、アウエルバッハ、クラカウアー)、各人各様の人生を歩んだが、パノフスキーは祖国に帰還しなかったグループに属している。それにしても、彼を含めて、世界的に有名な思想家、文献学者、作家を受け容れ、活動の場を提供したアメリカの機関、とりわけプリンストン大学および同高等研究所のレヴェルの高さには

瞠目すべきものがある。それは亡命知識人たちの拠り所となっていたのである。ところで、クラカウアーは言う、「亡命」の真の存在様式は異邦人のそれである」と。(亡命) exile の真の意味は、己の文化圏から歩み出る自由を持つと同様に、自分が住んでいる異邦の人々の心の中に入っていくに十分な束縛のない状態にある(前掲「往復書簡集」一七九—一八〇頁)。では、パノフスキーの場合はどうだったろうか。

#### パノフスキーと新世界

パノフスキーの人生行路は、前述した通り、大きく、ドイツ時代(一八九二—一九三三年)とアメリカ合衆国時代(一九三四—一九六八年)に二分されるが、移住後の生活に関して、彼は著書『視覚芸術の意味』*Meaning in the Visual Arts* (一九五五)の中でこう振り返る(最終章「合衆国における美術史三十年——移住した一ヨーロッパ人の印象」)。一九三一年に、彼はニューヨーク大学の招きで初めてアメリカに渡り、以後三年間、ドイツとアメリカを往復し、一九三五年にはプリンストン高等研究所に新設された人文学部へ招聘されたが、(以下、邦訳からの引用)「多

くの移住学者とはちがって、幸運にも、私はこの国に避難者としてよりは、むしろ賓客としてやってきた」と。

アメリカに移住した当初、身分や収入の不安定さはあったものの、彼の場合、新天地での生活が軌道に乗るまでにあまり時間はかからなかったようだ。続いて、同エッセイの中でパノフスキーは、彼が渡米する直前の十年間(一九二三—一九三三年)をアメリカ美術界の「黄金時代」と呼び、こう語る。プリンストン大学では「初期キリスト教美術、ビザンティン美術、中世美術における厳密な学風の恒久的伝統」がその間に形成され、ハーヴァード大学でも、「熱心な知識欲旺盛な若者」の数が増えて、合衆国は活況を呈していた。「ヨーロッパの美術史家たちは国家的・地域的境界によって考えてゆくように条件づけられているのに対し、アメリカにはこのような境界などはなかった」。アメリカの美術史家は「偏見でゆがめられることのない見透しのきく展望」のお蔭で、「過去」も「現在」も「正しく見る」ことができた。

パノフスキーは、もう一つ、アメリカで重要な発見をする。英語とドイツ語の相違である。彼によれば、美術史の著作の語彙は「ドイツ語圏諸国では他の国々よりもいっそ

う複雑かつ精密」で、ついには「洞察困難な専門語」となってしまった。その結果、「ドイツ語で教育を受けた美術史家は、自分の思想を英語で相手に伝えようとするには、みな自分自身の辞書を作らなければならなかった」。ドイツ語の術語は「必要以上に難解」か「まったく不正確」であることが多いのだ。例えば、一般に「戦術的」を意味するドイツ語 *taktisch* や「絵のような」*malerisch* には何種類もの意味がある。ドイツ語を母国語にする人は、英語で話し書く場合、個々の言葉が何を意味するのかを具体的に絞り込まなければならない。

こうして、「思想を理解しやすく、正確に表現することを余儀なくされ、またそれが可能であること」を悟ったパノフスキーは告白する、アメリカに移住したお蔭で、彼は「「ダースの特殊な論文」を書く代わりに、「全大家」や「全時代」に関して本を書く「勇氣」を持つことが出来たと。

アメリカ合衆国という異文化を体験することによって、パノフスキーはヨーロッパ的思考の限界に気付き、新世界アメリカで新たな展望を獲得し、英語を使用することで理解し易く正確な表現方法を学んだ。その結果、彼はドイツ

時代の精密な個別研究を、「全大家」（例えばデューラー）や「全時代」（例えばルネサンス）へと展開する「勇氣」を持つことが出来た。最後に、彼はこう締め括る、アメリカ合衆国に移住した美術史家は、「美術史を一般の興味の対象としてのみならず、学問らしい学問としても、よりいっそう生長させるのに寄与した」と。旧世界（ヨーロッパ／ドイツ）の学問の種を新世界（アメリカ合衆国）の土壤に播き開花させた美術史家、パノフスキーはまさしくその第一人者に他ならない。

## 二 業績

パノフスキーの業績は、『視覚芸術の意味』の独訳版（二〇〇二年刊）の「目録」によると、一八〇点にも及ぶ。本稿ではドイツ時代のものを中心に、以下、その詳細を紹介することにしたい。初めに、主要著作（単行本）を、亡命以前と以後に分け、その邦訳も含めて列挙する。（便宜上、整理番号を付す）



1 単行本(ドイツ時代)

- 1 『アルブレヒト・デューラーの理論的芸術学』(『デューラーの美学』)、ベルリン、一九一四年 Die theoretische Kunstlehre Albrecht Dürers (Dürers Aesthetik). Berlin 1914 (博士論文／ブライスガウのフライブルク) Inaug.-Diss.Freiburg i.Br.
- 2 『デューラーの芸術理論、特にイタリア人の芸術理論との関わりから』、ベルリン、一九一五年 Dürers Kunsttheorie, vornehmlich in ihrem Verhältnis zur Kunsttheorie der Italiener Berlin 1915.
- 3 『古典古代に対するデューラーの位置 余論二篇付』、ウィーン、一九二二年(『美術史各論五』) Dürers Stellung zur Antike. Mit zwei Exkursen. Wien 1922. (Kunstgeschichtliche Einzeldarstellungen.5) (『ウィーン』美術史年鑑』一、一九二二／二二年) (Wiener Jahrbuch für Kunstgeschichte.1.1921/22.
- 4 『メランジェロの素描』(一九二二年) Handzeichnungen Michelangelo (1922). 『美術史文庫』第三四卷 (Bibliothek der Kunstgeschichte.34.)
- 5 『デューラーの「メランコリア」』 起源と類型の一研究』(フリッツ・ザクスルと共著)、ライプツィヒ／ベルリン、一九二三年 Dürers < Melencolia I > Eine quellen- und typengeschichtliche Untersuchung (mit Fritz Saxl). Leipzig/Berlin 1923. (『ヴァールブルク文庫研究』二) Studien der Bibliothek Warburg.2. 『邦訳』『土星とメランコリー』 田中英道監修訳、晶文社、一九九一年(30参照)
- 6 『十一世紀から十三世紀にかけてのドイツ彫刻』、ミンネン、一九二四年 Die deutsche Plastik des elften bis dreizehnten Jahrhunderts, München 1924./II.
- 7 『イデア』「古い芸術理論の概念の歴史のための寄与」、ライプツィヒ／ベルリン、一九二四年 Idea.Ein Beitrag zur Begriffsgeschichte der älteren Kunsttheorie.Leipzig/Berlin 1924. 『邦訳』『イデア』伊藤博明・富松保文訳、平凡社ライブラリー、二〇〇四年
- 8 『分かれ道のヘラクレス、およびその他近代美術における古典古代の主題』、ライプツィヒ／ベルリン、一九三〇年 Hercules am Scheidewege und andere antike Bildstoffe

in der neueren Kunst. Leipzig/Berlin 1930.

2 単行本 (アメリカ合衆国時代)

- 9 『イコノロジー研究』「ルネサンス美術における人文主義の諸テーマ」・ニューヨーク、一九三九年 *Studies in Iconology. Humanistic Themes in the Art of the Renaissance.* New York 1939.  
[邦訳] 『イコノロジー研究』浅野・阿天坊・塚田・永澤・福部訳、ちくま学芸文庫、上・下、二〇〇二年
- 10 『ホイヘンス手稿とレオナルド・ダ・ヴィンチの芸術理論』・ロンドン、一九四〇年 *The Codex Huygens and Leonardo da Vinci's Art Theory.* London 1940.
- 11 『アルブレヒト・デューラー』、プリンストン、一九四三年 *Albrecht Dürer.* Princeton 1943.  
[邦訳] 『アルブレヒト・デューラー』中森義宗・清水忠訳、日貿出版社、一九八四年
- 12 『アルブレヒト・デューラー』、プリンストン、一九四五年 (改訂第二版)
- 13 『シュジェール、サン・ドニ修道院教会とその芸術財産について』、アーウィン・パノフスキー編・訳、プリンストン、一九四六年 *Abbot Suger on the Abbey Church of St-Denis and Its Art Treasures.* Herausgegeben, übersetzt und mit Anmerkungen versehen von Erwin Panofsky, Princeton 1946.
- 14 『アルブレヒト・デューラー』、プリンストン、一九四八年 (第三版)
- 15 『ゴシック建築とスコラ哲学』・レットロップ、一九五一年／ニューヨーク、一九五七年 *Gothic Architecture and Scholasticism.* Latrobe 1951/New York 1957.  
[邦訳] 『ゴシック建築とスコラ学』前川道郎訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年
- 16 『初期オランダ絵画』「その起源と性格」・ケンブリッジ (マサチューセッツ)、一九五三年 *Early Netherlandish Painting. Its Origins and Character.* Cambridge (Mass.) 1953.  
[邦訳] 『初期ネーデルラント絵画』勝国興・蜷川順子訳、中央公論美術出版、二〇〇一年
- 17 『芸術批評家としてのガリレオ』、デン・ハーグ、一九五四年 *Galileo as a Critic of the Arts.* Den Haag 1954.
- 18 『アルブレヒト・デューラーの生涯と芸術』、プリンス

- トン、一九五五年（第四版）The Life and Art of Albrecht Dürer. Princeton 1955 (4Auflage).
- 19 『パンドラの箱 神話的シンボルの変貌』（ドーラ・パノフスキーと共著）、ニューヨーク／ロンドン、一九五六年
- Pandora's Box: The Changing Aspects of a Mythical Symbol (mit Dora Panofsky). New York and London 1956.
- 『邦訳』『パンドラの匣』ドーラ&アーウィン・パノフスキー、尾崎彰宏・阿部成樹・菅野晶訳、法政大学出版局、二〇〇二年
- 20 『視覚芸術の意味』、ガーデン・シテイー（ニューヨーク）、一九五五年 Meaning in the Visual Arts, Garden City (N.Y.) 1955.
- 『邦訳』『視覚芸術の意味』中森義宗・内藤秀雄・清水忠訳、岩崎美術社、一九七一年
- 21 『ストックホルム国立美術館のプッサン神話画』、ストックホルム、一九六〇年 Mythological Painting by Poussin in the Nationalmuseum Stockholm, Stockholm 1960.
- 22 『西洋美術におけるルネサンスと複数のルネサンス』、ストックホルム、一九六〇年 Renaissance and Renaissances in Western Arts Stockholm 1960.
- 『邦訳』『ルネサンスの春』中森義宗・清水忠訳、思索社、一九七三年
- 23 『イデア』（改訂第二版）、ベルリン、一九六〇年
- 24 『サン・パオロのコレッジョの部屋のイコノグラフィー』、ロンドン、一九六一年 The Iconography of Correggio's Camera di San Paolo, London 1961. 『ヴァーブルク研究所研究』第二六巻 Studies of the Warburg Institute, 26.
- 25 『象徴形式としての遠近法』他 La prospettiva come >forma simbolica > e altri scritti (伊訳版)、ミラノ、一九六一年
- 『邦訳』『象徴形式』としての遠近法』木田元監訳、哲学書房、一九九三年
- 26 『視覚芸術の意味』Il significato nelle arti visive (伊訳版)、トゥーリン、一九六二年
- 27 『イコノロジー研究』第二版、ニューヨーク、一九六一年
- 28 『パンドラの箱』第二版、ニューヨーク、一九六二年

- 29 『芸術学の根本問題』ヘルリン、一九六四年 Aufsätze zu Grundfragen der Kunst-Wissenschaft, Berlin 1964.  
 『邦訳』『芸術学の根本問題』細井雄介訳、中央公論美術出版、一九九四年
- 30 『土星とメランコリー 自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』(R・クリバンスキーおよびF・ザクスと共著)、ロンドン／ニューヨーク、一九六四年 Saturn and Melancholy. Studies in the History of Natural Philosophy, Religion and Art (mit R. Klibansky und F.Saxl). London and New York 1964. (5参照)
- 31 『墓の彫刻 古代エジプトからヘルニーに至るその変貌』、ニューヨーク、一九六四年 Tomb Sculpture's Changing Aspects from Ancient Egypt to Bernini. New York 1964.  
 『邦訳』『墓の彫刻』若桑みどり監訳、哲学書房、一九九六年
- 32 『墓の彫刻』(Grabplastik (独訳版))、ケルン、一九六四年
- 33 『パンドラの箱』、ニューヨーク、一九六五年 (ハーパー・トーチブック)
- 34 『西洋におけるルネサンスと複数のルネサンス』(第二版)、ウブサラ、一九六五年
- 35 『イコノロジー研究』Essais d'Iconologie (仏訳版)、パリ、一九六七年
- 36 『アルブレヒト・デューラーの生涯と作品』La vie e le opera di Albrecht Dürer (伊訳版)、ミラノ、一九六七年
- 37 『ロシック建築とスロラ哲学』Architecture Gothique et Pensée Scholastique (仏訳版)、パリ、一九六七年
- 38 『イデア』Idea (英訳版)、コロンビア、一九六八年
- 39 『ティツィアーノ問題 大部分図像学的』、ニューヨーク、一九六九年 Problems in Titian, Mostly Iconographic. New York 1969. (ライツェン講義2) The Wrightsman Lectures2.
- 40 『芸術作品とその意味・〈視覚芸術〉論集』、パリ、一九六九年 L'oeuvre d'art et ses significations. Essais sur les arts visuels > Paris 1969. (仏訳版『視覚芸術の意味』)
- 41 『視覚芸術の意味』ハーモンズワース(ミドルセックス)、一九七〇年 (ペレグリン・ブックス) Peregrine Books
- 42 『視覚芸術の意味』Sinn und Deutung in der bildenden

KunstDuMont Verlag Köln, 2002 (独訳版)

概観——亡命以前／以後

アメリカ合衆国に渡る前のパノフスキーの著作では、デューラーとミケランジェロ研究を中心に、芸術理論の歴史(『イデア』)等が主なレパートリーとなっていたが、移住後、彼の視界は急速に拡大する。まず、『イコノロジー研究』を発表したあと、ライフワークの一つ『アルブレヒト・デューラー』をまとめ、『ゴシック建築とスコラ哲学』、『初期オランダ絵画』、『パンドラの匣』、『視覚芸術の意味』、『ルネサンスの春』、『墓の彫刻』、と代表作を刊行する。しかも、版を重ね、外国語に翻訳された作品も多い。パノフスキーの著作活動は、移住前と比較して、明らかに「全大作家」と「全時代」の方向に大きく展開している。しかし、ここで忘れてはならないのは、ドイツ時代の彼の仕事である。後にアメリカで集大成される学問の土台を、幅広く深く、彼はそこで構築しているからである。

ドイツ時代の業績

一九九八年に刊行された『ドイツ語論文集』(Erwin

Panofsky: Deutschsprachige Aufsätze, I/II Herausgegeben von Karen Michels und Martin Warnke, Akademie Verlag, Berlin, 1998) 全二巻は、パノフスキーのアメリカ移住前の論文の殆どすべてを収録している。そこには美術史家としての彼の出発点が示されていると同時に、移住後の著作には見られない魅力ある論文も数多く含まれている。第一巻は編者カレン・ミヒェルス／マルティン・ヴァルンケの「序」、一「中世」、二「デューラーとミケランジェロ」(一～六四九頁)、第二巻は三「ルネサンスとバロック」、四「方法と理論」、五「献辞と時事文」(六五〇～一一七五頁)の論文を収め、内容は次の通りである。

一 中世

- 1 アーロイス・フックス『バーダーボルンのカロリング朝大聖堂の中庭「アトリウム」跡』書評(一九二三年)
- 2 ミンデン大聖堂の西側建築(一九二〇年)
- 3 様式史の反映としての人体比例理論史(一九二一年)
- 4 ブラウンシュヴァイク大聖堂のキリスト十字架像とルッカの「聖像」(一九二三年)
- 5 ヘルマン・ベエンケン『ドイツにおけるロマネスク彫

- 刻』(十一・十二世紀) 書評(一九二四/二五年)
- 6 ハンス・ヤンツェン『十三世紀のドイツ彫刻家』書評(一九二六年)
- 7 ランスの四巨匠のシリーズについて(一九二七年)
- 8 ストラスブルの「エクレシア・マイスター」の芸術家系(一九二九/三〇年)
- 9 アドルフ・ゴルトシユミット『フライベルクとヴェクセルブルクの彫刻』書評(一九二四/二五年)
- 10 ニュルンベルクのゼバルドゥス教会の側廊入口の浮き彫りについて(一九二九年)
- 11 北方ゴシックにおける古典古代(講演レジюме)(一九二八年)
- 12 ヨーゼフ・コッホ『トマス・アクイナスの美学に寄せて』書評(一九三四年)
- 13 エルヴィン・ローゼンタール『中世の精神発展におけるジョット』書評(一九二四/二五年)
- 14 「ピエタ像」―「受難のキリスト」と「仲介者マリア」類型史への寄与(一九二七年)
- 15 G・J・ケルン『ユベールとヤン・ファン・エイクの消えた十字架像』書評(一九二七/二八年)
- 二 デューラーとミケランジェロ
- 1 古典古代に対するデューラーの位置(一九二二/二三年)
- 2 デューラーのアポロン描写とバルバリに対するその関係(一九二〇年)
- 2A レジюме「デューラーのアポロン描写とバルバリに対するその関係」(一九二〇年)
- 3 二篇のデューラー問題(いわゆる「博士の夢」と「四人の使徒」)(一九三一年)
- 4 アルブレヒト・デューラーのリズミカルな芸術(一九二六年)
- 5 聖ロレンツォ図書館の階段。ミケランジェロの未公開スケッチへの注釈(一九二二年)
- 6 ダゴベルト・フライの『ミケランジェロ研究』への注釈(一九二一年)
- 7 エルンスト・シュタインマン/ルドルフ・ヴィイトコヴァー編の『ミケランジェロ書誌 一五二〇―一九二六年』書評(一九三二年)
- 8 一九一四年以後のミケランジェロ文献(一九二二/二

二年)

- 9 ヴァレリオ・マリアーニ『パオリーナ礼拝堂のミケランジェロのフレスコ画』書評(一九三四年)
  - 10 F・クナップによるハールレムの「ミケランジェロ素描集」新版への注釈(一九二七年)
  - 10 A 新版解説(一九二八年)
  - 11 コピーそれとも偽造? ミケランジェロ工房の数葉の素描批判への寄与(一九二七/二八年)
  - 11 A コピーそれとも偽造? 再考(一九二八/一九二九年)
  - 12 ウベダのピエタ セバステイアーノ問題解決へのささやかな寄与(一九二七年)
- 三 ルネサンスとバロック
- 1 レオーネ・バッティスタ・アルベルティの遠近法手法(一九一四/一五年)
  - 2 象徴形式としての遠近法(一九二四/二五年)
  - 3 絵画の遠近法における様々な距離構成の考案(一九二五年)
  - 4 ヴィクトリアおよびアルベルト美術館の「デイスコルディア」[「不一致」]レリーフ 一つの解釈の試み(一九

二四年)

- 5 パラッツォ・ヴェッキオとの関係から見たピアッツァ・デッラ・シニョーリアの彫刻装飾(一九二〇年)
- 5 A ピアッツァ・デッラ・シニョーリアの彫刻装飾再考(一九二〇年)
- 6 ラファエロとシエーナの大聖堂図書館のフレスコ画(一九一五年)
- 7 ヤコピーノ・デル・コンテの一枚の図案(一九二七年)
- 8 分かれ道の老哲学者(画像学的目印の「アンビヴァレンツ」[「両価性」]の一例)(一九三二年)
- 9 ジョルジョ・ヴァザーリの『リプロ』の第一ページイタリア・ルネサンスにおけるゴシック評価に関する一研究(一九三〇年)
- 9 A レジュメ「ジョルジョ・ヴァザーリの『リプロ』の第一ページ」(一九二八年)
- 10 彩色ペンによる素描について ヴィルギリウス・ソリスの数葉とマクシミリアン一世の祈祷書の欄外素描への注釈(一九一五年)
- 11 ヴァァティカンのスカラ・レジアとベルニーニの芸術観

(一九一九年)

- 12 レジユメ「ヴァティカンのスカラ・レジアとベルニーの芸術観」(一九一九年)
- 13 ヘルマン・フォス『スカラ・レジアとサン・ピエトロの柱廊の建築家としてのベルニー』に寄せて(ある補足)(一九二二/二三年)
- 14 束縛されたエロス(レンブラントの「ダナー」の系譜学に寄せて)(一九三二年)
- 15 レンブラントとユダヤの伝統(一九二〇/一九七三)

#### 四 方法と理論

- 1 「造形芸術における様式の問題」(一九一五年)
- 2 芸術意思の概念(一九二〇年)
- 3 芸術史と芸術理論の関係について「芸術学的な根本概念」の可能性に関する議論への寄与(一九二四年)
- 4 造型芸術作品の記述および内容解釈の問題について
- 5 オリジナルとファクシミリ(一九三〇年)
- 6 美学と一般芸術学のための第四回会議における討論への寄与(一九三〇年)
- 7 美術史ゼミナール(一九二七—一九二九年頃)

- 8 ハンブルクのソクラテスあるいは美と善(一九三一年)(A・F・シンコプの筆名で)

#### 五 献辞と時事文

- 1 ハイインリヒ・ヴェルフリン 一九二四年六月二十一日、六十歳の誕生日に(一九二四年)
- 2 リヒャルト・シュテッティナーの思い出に(追悼文)(一九二七年)
- 3 A・ヴァールブルク(追悼文)(一九二九/三〇年)
- 4 グスタフ・パウリ(追悼文)(一九三二年)
- 5 ヴィルヘルム・フェーゲ 一八六八年二月十六日—一九五二年十二月三十日(一九五八年)
- 6 マックス・J・フリートレンダー 偉大な美術史家への祝辞(一九五七年)
- 7 序と補遺のために(アルパト・ヴァイクスルゲルトナーへの追悼文)(一九六二年)
- 8 ゴルトシュミットのユーモア(一九六一年)

以上の論文中、アメリカ移住後の著作に再録されたもの(一部あるいは多少の改稿を含む)は以下の通りである。



\*『視覚芸術の意味』（一九五五年）再録（ドイツ語から英訳）

一・三 「様式史の反映としての人体比例理論史」（第二章）  
／二・一 「古典古代に対するデューラーの位置」（第六章）  
／三・九 「ジヨルジョ・ヴァザーリの『リプロ』の第一ページ」（第五章）

\*『芸術学の根本問題』（一九六四年）再録（ドイツ語のまま）

三・二 「象徴形式としての遠近法」（第七章）／四・一 「造型芸術における様式の問題」（第一章）／四・二 「芸術意思の概念」（第二章）／四・三 「芸術史と芸術理論の關係について」（第四章）／四・四 「造型芸術作品の記述および内容解釈の問題について」（第六章）／五・一 「ハインリヒ・ヴェルフリン」（第三章）

大局的に見ると、アメリカ移住後の著作では、バロック期とその芸術家（ベルニーニ、レンブラント）が扱われることは稀で、理論に関するものもより少なくなっている。芸術理論を集大成した『芸術学の根本問題』は、右のように、刊行はアメリカ移住後であるが、所収論文は移住前に

ドイツで発表されている。『イコノロジー研究』も、アメリカ移住後、最初に刊行された作品であるが、その理論はドイツ時代最後の著作『分かれ道のヘラクレス』Hercules am Scheidewege（一九三〇）の中ですでに実践されている。パノフスキーにおいては、明らかに、「重心移動」（ドイツ語論文集）第一巻「序」XVI頁）が、亡命を境に、その前後で行われている。

『分かれ道のヘラクレス』は、全体が二部から成る。第一部「三頭の肖像」は（ルネサンス芸術におけるヘレニズム的偶像のシンボル）を副題に、全五章でテーマを論じ、第二部「プロデイクスのヘラクレス」では、（ドイツおよびイタリアの人文主義におけるギリシアの道德物語の再生）を副題に、全十章でヘラクレス像が分析・解説される。これに「付論」ティツィアーノの「聖愛と俗愛」、デューラーの木版画、美徳と悪徳の寓意、三篇が続く。全体はイコノロジーによる美術研究の成果と言ってよい。

以上、ドイツ時代のパノフスキーの著作と論文は、総じて、古典古代と中世キリスト教美術、ルネサンスとバロック時代、といった西洋美術史の王道を歩んでいると同時に、美学理論の考察を緻密に行っている。『ドイツ語論文

集』では、目次からも分かるように、建築と彫刻と絵画がバランスよく扱われ、個々の論文においては、美術をめぐって、文学と思想と歴史が交錯する濃密な世界が練り広げられる。一方、『分かれ道のヘラクレス』では、〈三頭像〉と〈ヘラクレス〉像を中心に、イコノロジーが縦横に実践される。

パノフスキーはアメリカ合衆国で美術史を「一般の興味の対象」にしただけではなく、「学問らしい学問として」進展させたが、その原動力は、祖国ドイツの学問的伝統によつて着実に培われていたのである。今後、それは注目されるに違いない。

付記

\*『ドイツ語論文集』と『分かれ道のヘラクレス』の中から、筆者は、神話を扱った論文を数点翻訳している（本邦初訳／図版付き）。最後にそれを掲げる。

・「エウロペの誘拐」（『ドイツ語論文集』所収「古典古代に対するデューラーの位置」第一章「古典古代のパトス」前半）（『ヨーロッパ文化研究』第三十一集、二〇一

二年）

・「束縛されたエロス—レンブラントの「ダナエ」の系譜学に寄せて」（『ドイツ語論文集』所収）（『ヨーロッパ文化研究』第三十二集、二〇一三年）

・「ティツィアーノの〈聖愛と俗愛〉の解釈に寄せて」（『分かれ道のヘラクレス』所収）（『ヨーロッパ文化研究』第三十三集、二〇一四年）

・「ラファエロの〈騎士の夢〉とそのゼバステイアン・ブランド『愚者の船』に対する関係」（『分かれ道のヘラクレス』所収）（『ヨーロッパ文化研究』第三十四集、二〇一五年）

・「アルブレヒト・デューラーの銅版画〈ヘラクレス〉」（『分かれ道のヘラクレス』所収）（『ヨーロッパ文化研究』第三十四集、二〇一五年）